

## 令和7年度3学期始業式式辞

皆さん、開けましておめでとうございます。新しい年、令和8年が始まりました。

今年の干支は、子丑寅卯辰巳、午。午年です。馬と言えば、我々人間との関わりは古く、日本でも各地の古墳から馬を模った埴輪が出土するなど、長らく生活や文化と結びついてきました。運搬や農耕に利用したり、神社に奉納して祈願する習わしもあり、これは現在の絵馬の起源にもなっています。この冬休み、絵馬に想いを託した人もそうでない人も、心安らかに過ごせる一年になることを願っています。

さて、今日は、来週月曜日の「成人の日」にちなんで、大人とは何かについて考えます。

生き物の中には、オタマジャクシと蛙、芋虫と蝶のように、子供と大人とで身体の形態や生活の仕方が劇的に変わるものがありますが、哺乳類では連続的に発育が進むので両者の違いを外見で判断することはできません。また、一人一人身長や体重も異なるので、体のサイズで判断することもできません。因みに私は小学6年生の頃、既に身長が170センチあり、子供料金で電車に乗るとたまに年齢を確認されることがありました。

では、年齢で、子供と大人の違いを判断することはどうなのでしょう。

4年前、民法の改正に伴って成年年齢が20才から18才に引き下げられました。明治以来140年ぶりの改正です。成年年齢の引き下げは、選挙権年齢等の引き下げに足並みをそろえたもので、若者の社会参画を促す目的があります。これは、少々乱暴な言い方をすれば、世の中の都合によって基準を動かし、法律上の大人を増やした、ということです。つまり、年齢で大人を定義するのは便宜上のことで、18才という年齢に本質的な意味はありません。参考までに、国によって成年年齢には幅があって、法務省によると、低いのはネパールの16才、高いのはシンガポールなどの21才。6才も違います。成年年齢は旅行者にも適用されるので、皆さんが今海外に出かけると、国境を跨ぐ度に大人になったり子どもになったりするわけですね。年齢による定義は国や時代によって異なるのです。

極端な話、中世のヨーロッパでは年齢による定義がないどころか、子供は「小さな大人」として扱われていました。子供はある程度成長して喋れるようになると、すぐに親元から離されて大人に交じって働いたのです。これに異議を唱えたのが、18世紀に現れたフランスの哲学者ルソーです。彼は、子供は子供として扱い、成長に応じて教育すべきであると説きました。やがて20世紀になると、人間のライフステージは細分化され、子供は、青年期、つまり12才から20才頃にそれまでに身につけた自分らしきを作り替え、成熟していくと考えられるようになりました。今まさに皆さんがそのただ中にいるわけです。

一方、ルソーが否定した「子供は小さな大人」という見方を、大人の側から捉えて「おとなは一生大きな子ども」だ、と唄ったのが、詩人の谷川俊太郎です。彼は「成人の日」という作品の中で「子どもは生まれでたそのときから小さなおとな／おとなは一生大きな子ども」と唄い、同時に、だからといって成人を迎えたら子供が自動的に大人になるのではないと、こんな風に続けます。「どんな美しい記念の晴着も／どんな華やかなお祝いの花束も／それだけではきみをおとなにはしてくれない。」では、何が我々を大人にしてくれるのか。

谷川さんも示していませんが、自分自信の弱さを認めて、周囲の雑音に紛らわされずに世の中を作り上げていこうとする姿勢が、大人への入口になる、と唄っています。

私見ですが、大人と子供の間に明確な境界線は引けません。毎日少しずつできなかったことができるようになり、一步進んでは半歩戻り、また一步進んでという繰り返しの中で、我々は少しずつ大人らしくなっていきます。皆さんも、これまでの学校生活の中で、時にクラスメイトや自分自身の振る舞いに大人らしさを感じた瞬間があったはずです。落ち着いた言葉遣い、誠実な態度、公正な物言い、自らを律する自制心、コツコツ取り組む根気強さ、誤ちを認める潔さ—自分もあんな風になりたいなと憧れたり、逆にちょっと自分を誉めてやりたいと思った経験があることでしょう。

大人とは何か。今日はこんな風に考えてみました。牧南の皆さんが、急がず焦らず、しかし着実に、自分らしさを作り替えながら、成長していくことを願います。

最後に、岩田晴男という詩人が書いた、「ラッセル」という作品を朗読します。この人は週末の山登りを生きがいにする多才な人です。また、ラッセルとは、冬山の斜面に腰の高さほど積もった新雪を体全体でかき分けて、階段のような道を作りながら登る、体力を消耗する高い技術です。地面の様子が雪に隠れて見えないので、危険と隣り合わせでもあります。

ラッセル	岩田晴男
人の後についていけば安全だ 道はさがさなくともよい いらぬ心配をしなくともよい 人の渡れた丸太橋はじぶんも渡れ 人の渡れた急流はじぶんも渡れ それが習い性になるうち 初めての冬山に行き 人の尻をみて登っているうち 前の人が登れた雪の階段が じぶんでは登れず崩し崩れ 流されて危うく谷間に 落ちる寸前にとまる そういった類いの経験を重ねるうち 人の歩いた後も案外信用できないな 一度自分で確かめなくてはと思うようになり それより横にでるか先頭にでるかする方が はるかにましだし喜びも大きいと思うようになった	

以上です。

#### 【参考文献など】

子供の誕生 フィリップ・アリエス著 ←小牧市立図書館にあります。

成人の日に 谷川俊太郎（「魂のいちばんおいしいところ」などに収録）

ラッセル 岩田晴男（詩集「白坂」に収録） ←非売品